

## 「<sup>よしゆく</sup>予祝としてのお花見」

太平川観桜実行委員会

会 長 三浦 喜夫

お花見と言えば、落語の「長屋の花見」のように、お茶の<sup>でが</sup>出廻らしをお酒に見立ててまでも酒盛りが付きものになっています。上野<sup>きよみず</sup>清水観音堂の有名な秋色桜（しゅうしきざくら）も、正岡子規が『<sup>だっさいしよやはいわ</sup>瀬祭書屋俳話』の中で元禄の四俳女とした一人の<sup>きくごていしゅうしき</sup>菊后亭秋色の「井戸はたの桜あふなし酒の酔」（酔狂はほどほどに）という句に因んだもので、ここでもお酒と関わりがあります。また、広重の<sup>ごんやまの</sup>「御殿山花見」「御殿山花盛」の絵の中にもお酒の<sup>かん</sup>爛をする携帯用の<sup>どうこ</sup>銅壺やお銚子が描かれ、花見と酒宴の強い関係がうかがわれます。

このように古来「花見」と言うと、その愛でる花は桜であり、そして、酒宴、酒盛りとは切っても切れない関係にあったようです。近年になっては花見酒で急性アルコール中毒になる人が続出し社会問題にもなったこともありました。それでは、どうして花見と酒宴と結びついたのでしょうか。それは、農耕民族である日本人が耕作物の基盤を稲作に置いて稲の豊作を祈るための稲霊（いなだま）なる「田の神」を<sup>まつ</sup>祀ったことに由来すると考えられます。

「田の神」というのは、「<sup>う か の みたまのかみ</sup>宇迦之御魂神」（食、たべもの、特に稲をつかさどる神）であり、伊勢神宮の<sup>げくう</sup>外宮の祭神となっている「<sup>とようけのおおかみ</sup>豊受大神」のことです。この「<sup>う か の みたまのかみ</sup>宇迦之御魂神」（<sup>うけもちのかみ</sup>稻荷信仰の保食神）が、稲作農耕民の間にあっては、稲作開始時期の春には山から里に降りて来て、農作業を見守るとともに豊作を約束する「田の神」として<sup>まつ</sup>祀られるようになります。この「田の神」は、収穫の終えた秋には「山の神」として山に帰っていく春秋去来の神でもあります。

この「田の神」が山から里または家に降りて来ることを「サオリ」と言い、田植えを終えた田から上ることを「サナブリ」と言います。「サオリ」は、「サ」が降りることであり、「サナブリ」は「サノボリ」に通じ、「サ」が上ることでもあります。つまりは、「サオリ」、「サナブリ」の「サ」というのは「田の神」そのものを表すことと考えられます。このことからすると、「サオトメ」、ということも、単なる田植えをする乙女というだけではなく、「田の神」と深い関わりのある乙女ということで、稲穂の穀霊こくれい、「田の神」に奉仕する聖なる乙女ということになります。また、「サナエ」ということについても、稲作農耕民にとっては最も重要で神聖なる苗のことであると容易に想像が付きまします。

この「田の神」が里に降りての仕事始めは、桜の木に留まって、まさに万朶ばんだの花を咲かせることであると言われていています。「サクラ」という言葉も、「田の神」である「サ」がお座りになる場所という意味の「クラ」と合わさって「サクラ」になったとも言われています。神（カミ）が座する場所で「カマクラ」となったという伝です。もともと冬場においては「田の神」は、「山の神」として山で活躍していて里にはいないので代わりに、「カマクラ」には農耕に絶対に欠かすことのできない大切な水の神「水神」が祀まつられることになります。

農耕民は、「田の神」がもたらした満開の桜の花の下に集い、「田の神」に感謝と、これからの耕作の安全、そして、豊作を願ってありったけのご馳走とお酒を供物くもつとして捧げ、「田の神」を手厚くもてなすようになります。この「田の神」に感謝のもてなしをする民俗行事が、石川県能登地方に「アエノコト（饗あえの事）」として伝えられています。現在、「アエノコト」は、ユネスコ無形文化遺産に登録されています。

「田の神」への感謝と豊作祈願として捧げられる供物<sup>くもつ</sup>には、勿論、酒も入っています。この「サケ」という言葉も、「田の神」の聖な奉仕者である「サオトメ」が醸<sup>かも</sup>したところの「ウケ」(宇迦：食物)<sup>うけ</sup>という意味で、「田の神」である「サ」と「ウケ」からできた言葉であるとも言われています。

さて、農耕民は、「田の神」へ感謝と豊作祈願のために満開の桜の花の下に集い、「田の神」へ精一杯の饗応をします。そして、自分たちも、その饗応に供したお酒をはじめご馳走を頂戴してお祝いをするようになります。そのお祝いは、秋の豊作を<sup>あらかじ</sup>予<sup>よ</sup>め祝<sup>しゅく</sup>うという「予祝<sup>よしゅく</sup>」の形をとり、この予祝<sup>よしゅく</sup>こそが、花見の原型であります。「花見」即ち、「予祝<sup>よしゅく</sup>の宴」となって、「花見」と「酒宴」とは不離の関係になったのではないかと考えられます。

去年は、新型コロナウイルス感染防止の一環として太平川の観桜会も中止となりました。今年こそはと期待をしていましたが、現在の状況下では、今年も観桜会開催が危ぶまれるようです。桜の花は、コロナウイルスと関わりなく毎年同じように咲きます。3密を避けて遠くから満開の桜の花を愛で、それぞれの生業<sup>なりわい</sup>の成功、豊作を予祝<sup>よしゅく</sup>して美味<sup>おい</sup>しいご馳走、お酒を味わってみてはいかがでしょうか。